

■ 戦後盛岡呉服町の店「カフェ・文化」エピソードから

★ 岩手の自然と歴史、盛岡の文化風土において

盛岡の自然風土は、山里に包まれた奥羽山脈の岩手山と、北上山地の姫神山の裾野に広がる北上平野へと南下してゆく起点の盆地である。そして雫石川と中津川が本流の北上河に合流する、「森と水と橋の小京都」でもあるのだ。この中津川と北上川の合流点には、「不来方城」こと南部藩の盛岡城跡が大公園として現存している。また、城を中心として東西南北の四地域に名称区分される城下町という点が、独特の歴史風土を象徴しているだろう。当然、川で区分して「河南と河北」とにもまた地域名称区分される。現在は、盛岡駅裏である「西南」地域の開発が進んでいる。

ここに紹介するカフェ「文化」は、岩手県の中心都市として栄えてきた城下町盛岡の、この最中心街にあった。昭和38年頃には閉店してしまい、現存していない。中津川に架かる主な橋は、上の橋・中の橋・下の橋と呼ぶ基軸の橋である。その「中の橋」界隈の路地にもそれぞれ名称が付けられている。「文化」はそのうちの旧「呉服町」にあった。宿場町として栄えた老舗大旅館や、本格派の芸子さんがいる料亭など、この粋な明治・大正の風情が、今日でも色濃く残っている地区一帯とも深く繋がっている。盛岡の近代文化風土の発祥地であるだろう。盛岡市内には「啄木新婚の家」もある。

終戦後まもなく、現「生姜町」の「岩手銀行」の対面路である、旧「呉服町」の入り口に、いわゆる本局である盛岡郵便局があった。この「中の橋」界隈の町並みは、「肴町」から「八幡町」の「八幡宮神社」へ続いている。あえて「呉服町の郵便局通り」ともいう。従っていわば通称、「呉服町の文化食堂」があった。現在では広く「肴町」に包括されもしている。当時の正式名としては「飲食店・カフェ〈文化〉」であった。現代での「スナック的軽食喫茶」と「レコード鑑賞喫茶」の合体したような店であっただろうか。戦時中はしばしば休業していたが、戦後に復活して再開店した。昭和38年頃までは営業していたという。

店主の浅沼伊三郎(昭和18年に48歳で没している)に拠って経営されていた。浅沼伊三郎は「盛岡西洋料理組合」の組合長も務めた。戦後は特に盛岡の大方の文人たちもレコード鑑賞などの目的で、足蹴く出入りした交流の〈サロン〉でもあったようだ。戦後の盛岡文化の復興発展に尽力された鈴木彦次郎、森荘巳池らが常連客であったという。花巻在住していた高村光太郎も来盛時に立ち寄っていたという。また、近くに「赤沢号レコード部」もあったことから、〈あらえびす〉たる野村胡堂も森荘巳池との交友もあって、指導的な関与していた。いずれこの店「文化」が、文字通り戦後の文化的雰囲気あふれる新市民の憩いの場であった。いわば戦後の新しい平和な盛岡の芸術文化(自由と民主主義)の、ひとつの発地点・交流地点の貴重な場所であった、とも見ることができる。

のちに、全国詩人新人賞であるH氏(平沢貞二郎)賞を受賞した若き村上昭夫も、この盛岡郵便局に勤めていて出入りしていた(昭和23年9月から25年の春まで)。村上昭夫と岩手中学校の同窓生で、同じ盛岡郵便局の同僚、石川徹氏(昭夫の1級下で現在も盛岡に在住)と毎日のように誘い合って通ったという。村上昭夫は「文化」で聴く「ドビッシェ」のクラシック音楽も好きだったという。村上昭夫は当時、職場の文化活動の方に忙しく奔走していて、混声合唱団を組織して熱心に指導にあたるほか、組合の機関紙や職場の文芸雑誌「息吹」の編集長を精力的に務めている。偶然のこととはいえ、鈴木彦次郎や森荘巳池からの文学への影響を受ける恩恵があったと言えよう。特に鈴木彦次郎とは、講演の依頼を引き受けて頂いたことなどで、とくに交友が深かった。村上昭夫にとって、本格的な詩作の前に先行して小説「腕」や「浮情」を書かせた理由に、小説作家としての鈴木彦次郎の励ましと、創作への勧めがあったものとみられる。

また、同じくサロン仲間であった詩人の森荘巳池が、宮沢賢治全集の編纂者であったこともあり、村上昭夫は先行して認知していた石川啄木に続けて、宮沢賢治の存在を当然に、日蓮宗「国柱会」入信も含めて承知していたらしい。近くの「文明堂書店」に賢治の童話も売られていたが、当時はまだ無名に近かく不人気で、宗教の問題もあって売れ残っていたと、先の石井徹氏は記憶すると言う。この郵便局勤務時代のエピソード

ードとして、村上昭夫を含む石川徹氏ら五人ばかりの同僚たちと、集っていた花巻温泉から高村光太郎宅に向う道の途中で、よく写真に見ると同じ〈背高く黒のゴム長靴で雨傘を持った光太郎〉に五人ほどの一行が偶然に出くわし、立ち話ならぬ〈道端座り〉でしばし会話をしたという。すでに旧知の村上昭夫が、後に俳号を「鈍牛(どんぎゅう)」とした由来に思い当たる。村上昭夫は、啄木も賢治も光太郎も、尊敬し学び、そしてこよなく愛着したのである。

昭和10年の新聞にインタビュー記事が載っている。それによると、客の注文に応じて最初はレコードをかけていただけだったが、やがて自分も興味を覚えて、大正12年頃から個人の趣味でも本格的に収集するようになったという。昭和10年には実に800枚に達した。すでに奥さんが結婚前から、レコード鑑賞の関わりで野村胡堂と東京で親交があったことを知り、店のレコードの面倒も依頼して見てもらうことになった。やがて広い店をファン客に開放して、毎月コンサートを行った。「コルトー」が演奏するピアノ曲が好きだったという。また、昭和7年頃からは盛中の加藤吉樹先生らの専門家たちと、レコードの収集と研究のグループを作って活動したりもした。店の蓄音機も最初は野村胡堂の推薦案内で、マーベル社のものを購入したという。後にはビクターの蓄音機を使った。

ちなみに、この「文化」に出入りしていた村上昭夫や石川徹氏らは、店のコーヒー缶(写真②)のラベルに「MJB」と書いてあるので、「M」は「モカ」、「J」は「ジャバ」、「B」は「ブラジル」のコーヒーの頭文字のことだと、マジに信じていたと言う。メーカー社名のイニシャルだったが、当時は誰しも「敵国の英語」には弱く、やむなき不勉強であったわけで、笑えるようで笑えないエピソードである。



村上昭夫と盛岡郵便局の同僚石川徹(岩手中学1級下級生 旧制16回生)と「文化」にコーヒーを飲み行くと何時も店内でMJBのコーヒー缶を見かけた。(進駐軍の横流しらしい?)

二人でMJBの名前の由来は、Mはモカコーヒーの頭文字でJはインドネシアのジャバコーヒーの頭文字そしてBはブラジルコーヒーの頭文字と真剣に考え信じていた。

(本当は、マックス Max Joseph Brandensteinと共同経営者である John C. Sigfriedがサンフランシスコでライス、紅茶などの輸入会社を設立。後にマックスはJohn Sigfriedから会社の権利を買い取り、弟マニー Manfred Brandensteinと共にM. J. Brandenstein & Companyを設立した。